

## カウント

## ムラカミ

それは突然見えるようになった。

朝起きると、まわりの物すべてに「数字」が見えたのだ。たとえば、スマホには「135」ベッドには「1757」などだ。

不思議に思ったが、学校に遅れそうだったので、ひとまずおいておくことにした。

下におりると父と母がいた。そして彼らの額にはそれぞれ「3」「735」とあった。どうやら人も数字がつくらしい。そして数字は様子から見ると私しか見えていないと思った。見えていたとすれば驚くはずだからだ。

私は急いでいたので慌てて朝食を食べた。そして廊下で父とすれ違い

「いってきます。」

とだけ言い家を出た。

次の日、数字が減っていることに気づいた。父が「1」になって母が「734」である。少し驚いたがまだこの数字の意味がわからなかったからなのか不思議と気にはしなかった。

その日も同じように廊下で

「行ってきます。」

とだけ言い学校へ行った。8月の朝日は朝と思えないほど暑かった。

父が死んだ。いきなりのことだった。

警察によると熱中症でたおれて、そのままということらしい。いきなりのことでまだ理解がおいつかない。

それから数日後、私は道を歩いていた。すると体に激痛が走った。そして道端に倒れた。

ガレージミラーには、腹に刺さったナイフと額にある「0」の数字が映った。

「そういうことか」と私は悟った。

……そしてすべてが終わった。

これが私の生前の記憶だ。今回このコンクールを利用して私が消える前に、私がいたことの証明をしようと思った。

そうしないとあまりにも私が報われない。私はまだ酒ものんだことがなかったのに、私はまだ生きたはずなのに、数字さえ、数字さえなければ。

まあ過ぎたことはもうどうでもいい。最後に私の名前だけは書いて証明は終了だ。

私の名前は村……